私のこの拙文は表題を『楕円のボールで遊んだころ』としたが，選手諸君にとっては，『楕円のボールに賭けた青春』，であったに違いない。最後に選手諸君の氏名を記載する。また故人が累増したいまごろになって選手諸君の記事を出すのは，マネージャーとして遅きに失した気もするが，それはともかく，苦しかったあの時代を楽しませてくれた選手諸君に，私も感謝のひと言をつけ加えたい。

「みんな，ありがとう！」

(FW)田中友雄，沢田仁三郎，伊賀上克明(主将)，関谷諄，
　亀岡純夫，故小原修，故武知昌昭，
(HB)中野隆司，
(TB)故北野収祐，故白石圭一，金井満盛，故家木哲，

(おわり)

【同窓会誌「明教」第 33 号(2003)を今回改筆】

c)「過去を語るより、未来を」

黒田　努(S27 OB)

平成 14 年 7 月 23 日の日経新聞の文化欄で【「坊っちゃんの島」に松再び】を読んだ。北岡杉雄(元小学校教諭)という先生個人の奮闘記である。四十島の「松」は夏目漱石「坊っちゃん」の舞台となったので有名な島である。その「ターナー島の松」が 1977 年に樹齢 165 年で全滅した。今ではその松が北岡先生個人の努力で甦り 33 本再生したことを報じていた。地元の農学博士に再生はできないとのご選択で見捨てられた話であった。北岡先生は専門家でなかったことが成功した秘訣だったのかもしれない。その北岡先生も途中で奥さんに「なんで、あんたがせにゃならんの」と言われたと書いている。意義のある仕事はそんなものかも知れない。実際はその奥さんの協力があればこそ成功したのであり感謝すべきである。またこの主題になっている「坊っちゃん」は我が青春でもある。自分が文学を何時頃から嗜みだしたのか定かでない。最初に読んだのが小学校時代有島武朗の「或る女」であった記憶はある。難しい漢字はルビを頼りに読んだのだった。小説の意味もさる事ながら、この本がなぜ我が家に存在したのか理由は知らない。唯一あった本らしい本がこれ 1 冊だったから読んだのだ。戦争中のことだから戦記ものはあったが読まなかった。理由は同じような話ばかりだったので途中で投げ出した。次いで読んだのが「坊っちゃん」である。感想の最初は小説の中で伊予弁を代表する「……ぞなもし」が文字になったことに不思議な感をもった記憶がある。それで夏目漱石先生にはやや違和感を持った。がその「坊っちゃん」中で道後温泉と並んで四十島の松には存在感があった。今度帰郷する機会があれば是非梅津寺から島と松を眺めることにしたい。漱石先生に出会ったわけではないが「坊っちゃん」に纏わる話は懐かしい響きを持っている。

時は 1996 年中国北京の駅、かなり照明の少ない暗いプラットホームで夜行の寝台列車(軟座列車)を待っていたときのできことだ。今回予定は北京から列車で移動して泰安市(山東省)泰山医学院を訪問することであった。その時招待元の大学(泰山医学院)から北京まで迎えに来たのが大学外事副主任で英語を教えている王寿亮先生(現外事主任)で、そこに日本語の出来る通訳として李光貞(現済南師範大学日本語系助教授)さんであった。大学外事部にそれまでいた通訳が名古屋に留学したので、この李光貞さんが出迎えにきたとのことだ。その李光貞さんは当時修士論文を書いている主婦で、ご主人は心臓外科医で子供が 1 人いる、中国ではエリートである。しかもテーマは「フロイドから見た夏目漱石論」といわれ一瞬戸惑った。話の中でこの李光貞さんから質問があった。「日本人として漱石をどう評価するか」とまじめに聞いて来たのだ。そこでまず「私は夏目漱石が嫌いである」と答えた。先生が理由を執拗に聞くので、坊っちゃんの赴任した中学は我が母校である。「田舎者の我が先輩をバカにしている場面があるではないか」と言ったとき、先生は驚いて返事がなく「中国では当時大変人気のある作家」として評価されていることを縷々説明された。現在は村上春樹、渡辺淳一が最も売れている日本人作家だ。セックス表現に特徴がある二人でもある。当時は中国で日本文学を専攻する学生・学者の中で圧倒的に夏目漱石・森鴎外・川端康成等が多いことは知っていた。時代変わって現代の院生が書く論文のテーマは「言語学」に関することを知った。ともかく異国で現実に出会うとは思ってもいなかった。以後李光貞先生とは、この事がご縁で中国の大学で日本語を教えている 21 大学の先生(教授)が日本文化について書いた本を出版するさい監修を頼まれた。その時の印象を機会があれば紹介するが文化大革命の被害は当分修復されることはないだろうと実感した。例えば魯迅と近代日本の話をした時「魯迅が 1 番で夏目漱石は 2 番」といわれて返事ができなかった。教育の影響は簡単にとり返す事はできない、文革による破壊は世紀を超えた問題であろう。この先生にしても漱石について、どんな作家として映っていたのか書かれた論文を検証したいものだ。

奇縁とでも言って好いのか愛媛大学医学部とこの泰山医学院は当時友好関係にあって。愛媛大学が研修医を受け入れていた。2000 年にはその泰山医学院創立 25 周年記念式典があり、愛媛大学医学部の外科教授と並んで当方も客座教授として招待され出席した。この愛媛大が交流のきっかけを作った三木元愛媛大医学部教授とも、異国で故郷の言葉を交わすことになった。中国で松山の事情を聞かされたのは大変感慨深いものがあった。同席したもう 1 つの国は、お隣の韓国は延世大学原州校からと紹介された。この大学も偶然だが小生外国で交流のある大学病院の 1 つだ。お互い招待されての参加であった。ただし専門が放射線科ではなく外科系の先生が中心であった。

「古希いまだ、気ぜわしく老体にむち打って働いています。」手紙であればこんな書き出しになる。現在忙しいのはボランティアとはいえ頼まれもしないことに手を出しているのである、いささか後悔の念も無きにしもあらずだ。その年の夏もモンゴル国に行ってきた。それは 8 年前に非営利活動法人・国際医療放射線学術交流協会(名前が長すぎるのも後悔の 1 つか)を立ち上げ翌年。その年の事業の一環で、モンゴル国立がんセンターを友好訪問した。初日モンゴル国立がんセンター放射線科(部)で塞栓術を行う医師グループ(大学の放射線教授)。午後には同病院の施設見学も行った。2 日目は医師グループは第 3 病院で内視鏡の研修を行い、技師グループは先のモンゴル国立がんセンターの放射線科医師、技師のグループと講演会と懇談会を行った。まず驚いたのは、この国では時間の表示が日本と同じであるから緯度の関係で夜の 11 時になっても明るい(時差 2 時間の相当か)。結果どうも朝がきつい。訪問時には 1 年 1 度のナーダムの時期で、その休暇のせいか街は照明が少なく暗いが夜遅くまで賑わっていた。こうした旅をなぜしているか。本来は業界を引退して、悠々自適の毎日のはずだったのが、こんな忙しいことになった。その理由は非営利活動法人法が平成 10 年に法律として成立した事に起因している。個人的な国際交流が発展して法人を申請することになった。我々が手続きを始めた平成 11 年当初は法人設立に関する要領が判らず、都庁の案内窓口でも担当がかなり緩やかな対応であった。その年の 2 月、書類が受理され手続きも終わり、認可の通知が来たのが 6 月であった。こうして法人としての活動を始めてから、現在で 8 年目になった。法的にはNPOといっても我々の組織はNGOである。現在取り組んでいる主たるテーマは団体名の示すように放射線医療を中心にして国際的な「遠隔画像診断と機器管理のネットワーク化」である、しかも医師と技師と業界を結んでのグループ化の例はあまりない。初めてのことであり、成功する見通しはない「分からない」のである。こうして活動を始めたが個人的には、いささか記憶力、体力も落ちてきたことを自覚させられるのが悔しい。これまでと違っているのは利益とか損得といったことを考えないことである。好い面としては理想を追うことができる事にある。従ってここに集まる人達に給料はない。あるのは接着剤的な意味で金銭ではなく現代では最も忘れられている「奉仕の理念」でしかないのだ。こう考えるとこの法人は何処まで行くのか分からない集団でもある。現下の日本社会の特徴である理念ない官僚や政治屋(実は個々には相応の理念も哲学も持っている)と違って共有する文化、理念が唯一の資本である。すこし考え方の違う人達にとっては居心地が悪い協会であるのか、いつのまにか来なくなる。

この集団の特徴は先にも述べたが医者・技師・業者が中心になって構成された集団である。詳細は省くがかなり特徴がある。日本の文化的風土で構築することが困難な構成要員でもある。あえてこの行動を起こしたのは私自身のまさに「生きてきた」ことの証である。かつて同期会のとき貞本君(医師)からの指摘もあったが、これからの社会の基盤をリードするのはNPO・NGO的な組織が国や政府、官僚を指導する時代である。これは文化的先進国では普通の潮流であるが日本でもこれから社会の下支えにこうした文化が発生発展しなければブラジル的な破滅がくるのである。

このことを少し詳しく述べてみよう。今年で(2006年)非営利活動法人(特活)国際医療放射線学術交流協会を設立して第4期目に入った。過去の事業を簡単に総括してみよう。正式法人として認可されたのは2000年6月であった。この年第1期目の特記すべき事項としては、中国の内蒙古自治区を初め黒龍江省・山東省を訪問したことだ。まず6月には内蒙古自治区でホロンバイル盟医院・ハイラル人民医院。黒龍江省のハルピン市、遼寧省では審陽市等で人民医院、企業医院(大慶油田)、ハルピン医科大学付属医院、中国医療器械研究所をそれぞれ訪問し、10月には山東省・泰山医学院での大学創立25周年記念式典に招待された。出席は愛媛大学医学部、延世大学源州校と我々の協会、日立メディコ(株)等の代表が並んだ。その年日本国内でも12月26日に発足記念パーティーを挙行した。130余名の関係者と来日中の泰山医学院王院長一行を迎えた事が印象的であった。協会設立2年目の2001年にはまず7月さきの韓国医療事情見学のため源州市を訪問した。伝統医学の尚志大学と近代医学の延世大学源州校を訪問し、伝統医学医食同源を尊重する韓国の医療事情についても多少理解する事が出来た。そこで大切なことは国際間でその制度や文化の違いを理解した上での交流にこそ意味があることを実感した。技術・制度を含めて必ずしも日本が先進国とは言えないことは現実である。さてここまでは順調な事業展開であったが、国際的な事業の困難さを痛感したのは、2001年9月にアメリカで起きた同時多発テロの影響を真っ向から受けることになったことだ。具体的には古井滋先生(帝京大学放射線教授)のモンゴル計画の中止、もう1つの計画である中国湖南省岳陽市人民医院の坂本力副会長(滋賀県公立甲賀病院副院長)の事業にも影響が出たのだ。決行はしたがかなり縮小しての実施になった。またこの年の3番目の計画であった山東省泰山医学院放射線系への訪問も結果小生1人で訪問する事になった。こうして海外事業はハプニングが重なったが、国内での計画である報告会・講演会を2002年2月1日に開催する事ができた。その内容は「第1回フォーラム・スタディセッション2002年」と銘打ち、厚生労働省保険局総務課から木村賢志企画官を招いて、「医療制度改革の方向」という演題の講演であった。これは我が協会にとっては大きな成果であった。この講演会等の詳細は別途報告したが、今後この事業も継続する方向で厚生労働省の了解を得た。したがって第2回目を2002年度中にも実施する。今年のテーマは現在厚生労働省と打ち合わせをしている、おそらく遠隔診断と遠隔機器管理のネットワークの構築問題を取り上げる予定だ。問題は組織の内部である、これも全てボランティアで運営されているので、現在協会事務局としては一丸となって組織面の資料としての会員名簿の整備、運営の透明性を高めるための会計関係の整備にも努力を重ねているが不十分である。こうして1つ1つと問題を解決しながらメンバーつまり協力者の数の拡充に取り組んでいるのが現状である。特に名簿の作成は組織の基本になり、これを資料にして興味のある人には「事務局ニュース」として協会の諸現状をお知らせしていくことにしている。

協会も第3期目の事業計画も引き続き海外はモンゴル・韓国・中国訪問等を計画している。参加要領については、逐一発表する。その他国内事業も厚生労働省講演による第2回フォーラム・スタディーセッション2003年を計画し準備を進めている。その他の計画としても国内では講習会・講演会も計画中であるがこれは問題である。今年より調査を始め近い将来に実現を目指しているが海外への技術援助活動として医療関係者の養成問題に取り組むことである。これは、この援助運動が継続出来る特定の相手国を設定し設備・スタッフを送る事業展開を計画する。現在すでに複数の候補をあげて検討し、現地との連携関係の確認を進めている。これには多くの困難な問題が予想以上に大変な事業である。成功するか、しないかは会員の総力がすべてである。JICAとのリンクも重要な要素である。

第4期目の最初の計画として第1回国際シンポジュームを国内の放射線医学界の中で開催に向けて準備をしている。現在「国際的な遠隔画像診断・機器管理のネットワーク」をメインテーマと考えて準備している。関係の放射線医学会(会長阿部東京医大教授)、技術学会(会長川村義彦日医北総病院技師長)、学会事務局(東事務局長)それぞれに了解を取り付けた。これら関係者が活動に理解を示してくれ順調に準備は経過している。資金問題がこれからである。理事長として設立したこの(特活)国際医療放射線学術交流協会の大きな目的はあるが、力足らずで理想にはほど遠いのが現状である。この年の問題はサーズ騒動にあった。感染症の怖さは歴史から学ぶべきだ。香港（中国）発進の感染症は北京に飛び火してご記憶の通りに展開した。医療施設におけるリスクマネージメント問題に反応するにはまだ早い国が多くある。実体験としてこの年の国際交流横浜大会は直前で中止こそ免れたが招待に応じたのは中国のみであった。

2005年は山東省青島市立医院を訪問し、協会の副会長森山紀之（がんセンター検診センター長)、同室長飯沼元の両先生による講演会を開催した。この青島市立医院は北京オリンピックの関係で設備は超一流。がんセンターの招待で関係者の来日も実現した。今後世界的な視野での共同研究も実現する。後日、青島市立の医師を招待（がんセンター）により来日されて今後の目的を持った交流が実現することになった。これは非常に我々放射線医療の関係者にとっては大きな意味がある。

さらに日本での研修をサポートすることも重要な交流であった。泰山医学院放射線系院長劉林翔先生の来日のお手伝いも出来た。そんなことで泰山医学院兼職教授に次いで青島市立医院の顧問就任依頼があった。

2006年の新しい特徴は、従来の交流もそれぞれ個々に推進している上に、さらに日本語教師によるレクチャーを有志がボランティアで行うことが始まった。言葉と文化の問題は非常に重要で、相互理解と相互信頼に欠かせない事項である。言葉を通して今後交流を進めるべきで、対等で信頼しあえる関係の構築する必須条件である。

医師・技師・業界の3者による共同作業を実現させるためには問題が多くて、目標に向かって努力を重ねているが非力である。また発展途上国との友好親善をとおして自分の持っている力を発揮し、協会の趣旨を理解したうえで是非協力を希望する。つまりこの国際交流のボランティアをとおして他国の文化を学び、ひいては日本の将来に寄与してくれる事を期待する。人間は「他を知ることは自分を知る」事になり、新しい自分発見が「より人生を豊かに生きる」ことになるのである。これが現況の概略である。

卒後50年、良くも生きていたもんだね。しかし束の間の時間であったような気もする。その時間と以後の時代を共有してきた同期の友人。幾つかの心に残る思い出が今日を支えてくれたことは確かだ。振り返ればほんの2年間の在学でしかなかった松山東高等学校時代は尊い時代である。先ず青春の1つに当時松山東高校体育館の脇に水飲み場があった。ラグビーの練習が終わると夏の暑い日などは特に一目散でグランドからその水飲み場に走ったこと。汗が出ても途中で水を飲む習慣はなかったから余計である。急ぐ理由のもう1つは、実は大きい声では言えないが水を飲むことだけではなかった。体育館の中で行われている体操の女子部の練習を覗くことであった。締め切った窓からは殆ど覗きの目的を達成したことはない。しかし声や物音で結構楽しんだものだった。本当に女子体操部の皆さん「ごめんなさい」。ささやかな青春をしていたのだ。また普通の時間帯でも校舎床が板バリなので廊下を下駄で歩くことが禁止されていた。そこで朝学校に着くと弁当を食べて、ラグビー部室で下駄を脱ぎ裸足で教室に行き授業を受けることがあった。それが証拠として今も残っている、2年4組のクラス写真をみると小生1番前の椅子列の席に裸足で座っている。状況は集合時間にやっと間に合って後ろに隠れていたのだが前の椅子が空いているので呼ばれて前の席に座る事になった。裸足である証拠を残した事になる、何とも恥ずかしき青春のアルバムだ。

1945年に終わった戦争、その戦争のあとに来た混乱の中で、教育制度も混乱し旧制度から新制度への変化があり、価値観の混乱

が日本の社会全体に希望の持てぬ時代であった。自分の事を書いておこう。本籍である温泉郡川上村小学校に在学していた。これは父親勤務が警察で周桑郡の壬生川署であったのが出征のために実家に帰っていた。出征とはいえ明治生まれの老兵は国内出征であった。また 8 月 15 日には偶然であるが入隊した徳島連隊から休暇で帰宅する事になっていたので途中で玉音放送を聞いた。それは松山市駅(伊予鉄)だった。数日間居て原隊に帰るといって出ていった。9 月早々には復員し、本来の職業である警察官に戻ることになった。9 月終頃であったか。勤務先がきまり周桑郡の小松町駐在所に移った。従って小学校も同時期に転校したのだ。これが 6 年生の秋である。じつは川上小学校の卒業生ではなく正式には周桑郡小松小学校の卒業生である。当然中学受験が問題になった。転校先の小松小学校で親は今治中が西条中を予定していたようだが学力のない子供、学校も困った子供を抱えて最後子安中(現小松高校？)に入学することになった。入学した直後、これも時代の流れか農地解放問題で急遽川上に戻って来ることになった。中学に転校も出来ず新制中学へと転入、新制中学から再度新制高校に入学試験を受ける事になる。それも希望校は受けられずグループで受験し、県の指定する高校に入る事になった。結果はて松山北高校に入学が許可されたが翌年には通学区制度が採用されて松山東高校普通科に変更される。おわかりですか、三年間同じ学校に通った記憶は在りません。在学当時、伊予鉄道松山市駅頭から視界に入るのは、焼け残った土蔵が畿棟かが印象に残っている。「ロンドン屋」のアイスクリーム、「あさひ」鍋焼きうどんには特別の思い出がある。そんな状況が今も帰郷するとふっと浮かんでくる。また 45 年夏は原子爆弾をも間接的に体験し終戦を迎えた。戦後の制度に振り回される経過で青春を迎え、過ごした学校時代。思い返せばその僅かの時間がどれほど自分の人生に影響を与えたか、不思議な気がする。しかしこの期間こそ生涯を決定させたなにかがあった。あの狭いグランドを共有しての練習も意味が在るのだろう。水泳、テニス、バレー部はそれぞれが独自の領域を囲っていた。野球部とかサッカー部とラグビー部はかなり重なり合った部分で練習をしていた。特に体操部はうらやましい存在だった。このグランドで運命のラグビーとの出会いがあった。この事によって人生に大きい指針を得たのだった。それは今日まで継続した自分の人生を決定する事にもなった。人との出会いである。同僚 6 人は当然であるが、共に戦った 1 年先輩である岡本、飛田、野中の 3 人と、27 年から商業科が松山商業となり、四国代表で全国大会に出場を果たした後輩たち、更に指導してくれた先輩田中友夫さん、桑原、綿井(直接に先輩ではないが、後の日本体育大学ラグビー監督、学長)の先輩達であった。こうした素晴らしい人達に巡り会えたのもラグビーであった。協会の設立に賛同協力してくれたのがラグビー野郎だったのも奇縁である。母校で巡り会った人、ラグビースピリットに支えられた人生。年齢を重ねるに従って熟成されてきたものに何かがある。そうした高校生活も終わり、ギィヤチェンジをして少し勉強を考えて松山商大に入ったが、そこで事情があって途中退学して上京した。以後結局は法政大学卒ということになり現在に至るのだ。少し変わった経歴となったのも最初に勤務した会社の社長命令で「レントゲン技師学校」に内地留学をさせられた事にある。それが機縁になって現在の自分があるのだ。それが城西学園で、いまや大学に発展し 2007 年に城西医療科学大学を開学することになった。その城西学園(中学・高校・専門学校)で非常勤講師・同窓会長・学園評議員として係わってきたこと。放射線技師学校同窓会連合を組織したことも懐かしい思い出である。そこで国際交流の経験も山東省泰安市泰山医学院放射線系を中心であったが、その中国との 12 年間を発展させることで、非営利活動法人・国際医療放射線学術交流協会を理事長として設立することになった。それが経緯である。過去は放射線技師を中心とする交流を 10 年間行ってきたがその中に医療放射線技術面での限界を感じたこと。さらに日本の外交特に援助国への対応が問題にされている実体を観察することで得た情報、これは海外青年協力隊に参加した人達の声を聞くに及んで放置できないと思い、この 2 つのことで結論が見えてきた。つまりこれこそ非営利活動法人の理念であるべきだし、これを理解出来る人達の集合体を作るべきである使命感が湧いてきたのだ。それは自分が生きた世界に残せる組織を構築できれば望外の事になる。我が人生最後のお節介である、悔いのない老年にしたい。過去の栄光ではなく明日の栄光を見よう。ご存じ日本の医療界は免許制度、つまり資格が全てを制してきた歴史がある。医療法は明治 6 年に制定されたものがいまだに生きている。これが基本となって、戦後貧乏な時代の医療制度を社会保険制度として広く浅い、アクセスを中心とした利便性のみのものである。この制度は日本が世界でも類を見ない成功させた国である。しかし、この社会主義制度も制度疲労を起こし始めた。最近の事件として横浜市立病院事件、東京女子医大事件、川崎生協病院、杏林大学病院の例がある。これらの事件を解決する対策としてはかなりの制度改革が必要である。モンゴル国の国立がんセンターを訪問し、講演会の後での懇談会の事であるが「医学部に入る条件、高等学校卒業と 1 年間の看護師経験」がこの国の入試の条件になっていると聞いた。帰国報告に訪れたとき厚生労働省の役人が聞いていた。国際交流とは概論的には国家間の友好はイデオロギーとか経済問題が前面に出ることで相互に理解しあえることではない。やはり原則個人と個人が基本になって行くべきである。それぞれの国の文化に裏打ちされた価値観に違いがある以上、簡単には実現しないだろう。最近「中国系新聞・ドラゴン」に掲載を依頼されて書いたのが「草の根外交」と題する個人と個人の出会いがもたらす信頼と感動を書いた。それは多くの人との出会いに支えられた自分の今日の姿でもある。しかし簡単に文化・価値観の違いを越えることはできない。夢かも知れないが希望は持とうよ！　そんな社会性のある行き方を選択した方が楽な行き方ではないだろうか。ラグビーに出会い「ノーサイド」を知ってからの人生は、ゲームを終了まで戦った敵と肩を組んでグランドを去りたいと念じている。遺言ではないが活躍する現役の後輩に一言。神奈川県知事の松沢成文が日経での苦言だ「かつて国立競技場を観客で埋め尽くすことはラグビーくらいであった。当時の人気に甘えて対策を怠った」協会を責めていた。そして芝生のコートが何面もあるニュージーランドやイングランドのようにコートの中心にクラブハウスを持った環境整備を進めたい。さらに奥大使のイラクでの事故、つい最近は宿沢広朗の訃報がある。これらの人が築いてきたラグビーの真髄は個人プレーに頼らぬ「「One for all, all for one」の精神面だと思う。これらがあって、ラグビーのワールドカップ開催に手を挙げてください。今、加齢により俗界から離陸しながら感じることである、過去の栄光に縋る生活ではなく明日に向かっての生き方。仏教の極意である「今日死んでも悔いのない生き方」を考えたい。

拙文を掲載するチャンスを与えてくれた友人達に感謝し、お互いの健康を祈って終わりにしたい。

【関東明教 第 6 号(2005)を今回改筆】

d)国際・非営利活動に参加して(松山離れて半世紀)

黒田　努(S27 OB)

一、非営利活動法人・国際医療放射線学術交流協会に参加して

2000 年に非営利活動法人・国際医療放射線学術交流協会を設立し、初代理事長に推された。今年で 7 年・4 期目に入った。張り切っていたが、残念ながらさしたる成果を見ないままである。反省しきりの今日このごろだ。

思い出してみるとまず設立の動機である、今になって人の出会いにラグビーがあった。高校時代にほんの少しかかわったラグビーであったが、これが人生の理念として節目節目で因縁を感じている。まず設立した会の会長岩崎直弥先生(独協大学名誉教授)とはラグビーが縁で意気投合した。それが、協会設立の原点になったのだ。教授は現役時代にはスタンド・オフで、筆者はフォワードであった。このことがきっかけで始まった。

会長の関係で理事の大方は大学で現役の放射線科教授・助教授である。また放射線機器業界からも大手の海外事業部長経験者の参加、さらにこれらを扱う放射線技師の立場からは技術学会の名誉会員が参加している。医師・技師・業界の混成陣営は意図的に集めたのだ。

また地域では外国との交流実績も会長はモンゴルをはじめ複数国、筆者は中国、韓国が中心である。各理事それぞれ得意の国がある。たとえば韓国・タイ・モンゴル・インド等々である。事業

目的としては「先端技術の指導・がん治療と撲滅」を中心に掲げての活動を進めている。たとえば、横綱朝青龍基金の呼びかけで「モンゴル国」での医療の近代化計画が進行している。そこで具体的には、モンゴルへの技術サポートがある。さらに、企業の出先国での企業検診も計画中である。遠隔医療が制度としてとり入れられたので日本の医療制度も変革への道程が始まっている。

二、日本と中国問題

中国での体験を少しレポートしよう。まず過去に訪問した年数では 15 年。回数では正確には覚えていないが、長城には 13 回は行った。また本業の講演以外でも日程を調整して、北はハルビン郊外の 731 部隊記念館。南京でもあの記念館、昨年は大連の日露戦争跡地等も見学した。これらを見学するときに共通して実感するのは、案内する地元の中国関係者(観光ガイドではない)が一番恐縮して対応することである。余談ではあるが、昨年のサッカー騒ぎも人民には報道されないから、何事があったかを知らない。現実には個人レベルでの友好は良いと思っているが、国レベルとなると問題があるようだ。ともかくお互いの歴史教育の違い、その他の言論報道による中国の国内での情報が少ないことも問題ではないだろうか。

次に具体的な交流について紹介すると、1989 年から今日まで、放射線関係の学術交流として中国にかかわってきた。その中心なる場所は、中国山東省泰安市の泰山医学院である。ここで兼職教授として、また同じ山東省青島市立病院顧問の肩書きが 2006 年に加わった。

泰山は有名な世界文化遺産として最初に登録された山、東岳・泰山の麓にある 5 年制医学系単科大学である。ここでの仕事は、放射線管理学についての講義であるが、日本とは教育制度が違うので比較はできないが、日本で言えば 5 年制の「放射線技術系学部」と考えていい、卒業すると放射線技師になる。就学目的が日本と違って「画像診断学」である。したがって、これに必要な講義や臨床実習で構成されている。最後の 1 年間は画像診断の臨床実習を病院で行う。さらに卒業後病院に配属され、まずは放射線技師であるが、やがて放射線医になる道もある。学校の歴史は、今年で創立 30 年を迎えたばかりの新しい大学である。この大学は、中国で最初に放射線技術学科を造った。驚くのは大学の敷地の広さ、新キャンパスでは学生宿舎(基本的には大学は全寮制)から一番遠い教室に徒歩でいくと 30 分(学内に簡易タクシーが運行している)かかるそうだ。広さは日本では想像もできない。その新キャンパスが完成した。

最近の実体験をひとつ紹介しよう、それは 2003 年 10 月泰山医学院放射線科でのことだ。旧キャンパスで所定の講義も終わり、ほっとしていると、新キャンパスに案内された。予告もなく一部使用している新教室で話すことになった。手持ちの資料(パソコンにある資料をパワーポイントから急遽準備)を使ったが、教室はまだ工事中で、部屋の遮光設備がない。ともかく原稿なしで日本の教育制度、国家試験による資格制度、これからの画像機器の発展等を 2 時間講演したのだ。こうした話では最後のまとめとしていつもラグビースピリットの象徴である「One for all, all for one」を使ったことは言うまでもない。そして後日学部長にお願いして学生さんの感想文を送ってもらった。一部拙訳であるが簡単に紹介すると。「生まれて初めて、日本人先生の講演を聞くことができ、光栄に思っている。中国語での短い自己紹介がとても印象的で、先生は中国文化と中国人に対する特別な思いがあることを知りました」、はじめて日本人を見たとのことには驚いた。これで彼らが、これまでの学校教育で得た知識を推測することができる。が一面では謙虚に「自分たちが関心を持った話題は、医学影像の発展についてのことです。これに関する知識をもっと知りたいと思います。今回の講演で今までの自分の知識の小ささを痛く感じました」と結んでいた。

また昨年の 6 月には、北京首都医科大学で放射線技術学系の卒業間近の学生さんを対象として話をした。まず彼らは、江沢民の歴史教育(詳細は中国の歴史教科書を参照)で卒業した世代である。3 時間の話のあと、会場で学生から「尊重是相互的」と書いたメモを渡された。その彼から 15 年戦争の責任について質問と言うより大演説があり、担当教授が中止させたが、筆者自身もかなり緊張した場面であった。歴史観の違いを説けば問題はないと信じている。

こうした経験をすることで岡本行夫氏(外交評論家・前小泉首相顧問)も言っているように、中国の若者たちに、「日中友好」と訴えるだけでは弱い。今、私たちが考えるべきは、これ以上対日感情の悪化をどう食い止めることができるかということである。中国は日本にとって圧倒的に大事な国で、関係改善は悲観論よりも楽観論をもって臨みたい。まずは 1 人でも多くの中国人に対し、日本の実情を伝える努力をしていかねばならないことを体感した。現在の状況は道半ばではあるが、個人と個人の友好・信頼を積み上げること以外に自分ができることはないと実感したのだ。

かつて中国巨龍（週刊紙）に草の根交流という題で原稿を書いたことがあるが、そこでも個の交流こそ大切で、無知こそ誤解の源泉ではないかと披瀝したことがある。先に述べたように若者に期待して将来を考えたい。結果として兼職教授として泰山医学院、顧問を要請された山東省青島市立医院でも草の根外交的な交渉が源泉だ、結果「仲間造り」こそラグビーだと現関東学院春口監督を説いた綿井元日体大学長の理念と同じではないだろうか。

三、わが人生での東校とラグビー

関東明教第 5 号で、東校ラグビー部の歴史を拝読し、筆者自身もかつてこの部活に参加した 50 年前を思い出した。輝かしい歴史の中にいたことを思いだし、誇りに思った。現在 70 歳を過ぎたが。12 年前から我々が東校を卒業する時、ラグビー部に所属していた 6 名の老ラガーが、1 年先輩も誘って時々旧交を暖めている。これはかなり楽しみな集いである。きっかけは還暦を記念して母校のグランドで集ったのが再会の始まりであった。以後場所を変えて 12 年間継続している。欠けた年もあったが、京都・山口・松山等々を転々と集合場所にしてきた。東京住まいは筆者 1 人である。毎年のように計画はするが、残念ながら計画を変更することがある、理由はメンバーの病気が原因であったこともあった、神戸大震災もあった。こうした折々の理由で延期することも仕方のないことだ。つまり天災・加齢よる宿命だろう。

部史の記事で言えば、自分がかかわった時代に注目した。三輪田綱丸君が部の存続に苦労したこと。高校から大学では神宮秩父宮ラグビー場で早稲田の選手として活躍し、卒後も八幡製鉄のメンバーとして(当時は日本最強クラブ)日本代表選手として活躍し、神宮で密かに応援した尾崎政雄君の雄姿とか、この 2 人の姿が昨日のことのように浮かんで来た。

また読みながら正確な歴史を記述することの難しさも実感し、それが歴史であり関係者の記憶でもあるのだ。戦後混乱が教育制度にも影響した大変な時代であった。それを今日では理解することはできまい。当時の社会状況では、自然の成り行きで制度に翻弄されながら任意団体の部活が、いかに存続に苦労したか。新制度により優秀な主力選手のいなくなった部が、15 名の選手確保に苦労したこと、新田高校に勝てないまま後輩達に次代を託したのだった。結果は普通科・商業科に分割され、分離した一方の商業科が松山商業高等学校として次年度全国大会に出場を果たした。そして普通科(いわゆる東高)に残ったのが三輪田綱丸以下数名だった。

振り返ってみるとほんの僅かな期間の部活参加であったが、そこで培われたラグビースピリットが、今日でも筆者自身の人生における価値観の規範になっているようだ。ラグビーの真髄は「ノーサイド」という言葉でも表現される。ゲームセットではなく「ノーサイド」である。

ともかく老ラガーの集いが懐かしさより、すでに両親もなくなり、遠くなった故郷への絆としてある部活での人間関係に万歳し、人生の幸福を感じている。あと何年続くやら。こうした体験、東高でのラグビーとの出会いが今日の非営利活動・国際医療放射線学術交流協会まで来た人生。そこにある熱いものはラグビーで培われたことが前提になっている。

現在 8 年 4 期目の総会で新会長と一緒に理事長を務めることになった、奇しくも前岩崎尚弥獨協大学名誉教授も二代目会長坂本力公立甲賀病院副院長も共に大学医学部時代にはラグビー野郎であったと聞いた。

こうして人生最後に係わった社会活動にもどこかラグビーが匂

うのも愉快であり因縁をかんじるのである。大学入学後の出会いで失敗も経験したが、決してめげることはなかった。最先端のがん検診に係わる問題。それらの機器開発で我が同期会長の貞本君が日本の X−CT 開発と国産化に貢献したことも因縁である、先のふたな会（同級会）でも彼とそんな話しが出来たのもまた縁である。これらの関わりもなぜか身近に存在することも不思議に感じる。

非営利活動文化が、先進国なみに日本社会に根付くのはいつになるだろうか。中華思想である自己中とは対極にあると思うのだ。

最後に感謝をしたいのはこの部活の 75 周年誌に掲載されることは非力な者にとっては名誉なことである。またわが人生で松山東高とラグビーが原点になった事に感謝して終わります。

【同窓会誌「関東明教」第 5 号(2004)より】

e)ラグビーの真髄

尾崎　政雄(S30 OB)
和田　憲明(S30 OB)
司会　小椋勇記夫(S32 OB)

小椋　尾崎さんは東高から早稲田へ、和田さんは青学へ進学してラグビーを続けられたんだけど、当時のラグビーと今のラグビーの違いは？

尾崎　我々がやっていた頃のラグビーはオールラウンド・ラグビーで、遠いところで勝負するラグビーだった。相手が 1m走るならば 1.2m走って勝とうとしたんだ。近代ラグビーはボールを持ったら FW に近いところでゲインを切る。自分は 0.8mで相手に 1m走らせて勝とうとする。効率的なラグビーに変ったよ。

和田　レフリーやってた真下(現日本ラグビーフットボール協会専務理事)が言ってたけど、今のラグビーは「ぎしぎし」って音がするんだそうだ。当りがきついのだろう。

小椋　我々の頃はゲインラインなんて言葉はなかったけれど、今は重要ですか？

尾崎　うん。今は効率的な攻撃をしようとするからね。世の中自身がそうだから。

小椋　正月の高校ラグビーご覧になりました？　啓光学園が 3 連覇しましたけど。

和田　今の高校生はすごいよ。啓光のラックへの突っ込みなんかすごい。めくりあげるように突っ込むんだもの。

尾崎　啓光は組織ディフェンスがしっかりしていたね。誰がどこを止めるかという事を徹底的に教育している。近代ラグビーは「攻撃は最大の防御なり」でアタック有利だけど、啓光は攻撃型の選手を揃えてディフェンスするんだ。監督がしっかりしている。すごい監督だと思うよ。

小椋　高校ラグビーっていうのは、やはり監督のウェイトが高いのでしょうか？

尾崎　高校生レベルでは監督のウェイトは高いよ。野球では 9 割。ラグビーでは 3 割かそれ以下。でも、普段の練習やポジション決めなど、監督の考え方はものすごく影響している。高校生は、いい指導者につけば才能を引き出すことができる。大学生に近いプレーをする事ができるんだ。監督はラグビーに対してしっかりした考え方を持ってないといけないね。カリスマ性が必要だ。信念と指導力と選手の能力を見る目を持った人物、そういう人でないといけない。

小椋　我々の時の指導者というと、三輪田さん［三輪田綱丸(昭和 29 年卒)］の名前がまず浮かぶよね。

和田　三輪田さんは我々に展開ラグビーを教えてくれた。技術的にすごいよ。上級生の中ではかけがえのない人だった。

尾崎　「紳士たれ」というのを教えてくれたね。相手のミスに手をたたいて喜ぼうものならゲンコツが飛んできた。そういった姿勢に魅力を感じたよ。

和田　それと河邊さん［河邊八郎(昭和 15 年卒・故人)］と丹下さん［丹下孝三(昭和 23 年卒)］。河邊さんと丹下さんがいて初めて我々があったと思うよ。

小椋　話は変りますけど、ラグビーの魅力って何でしょう？

尾崎　ラグビーの魅力は戦いなんだよ。戦いの中のサポート。味方が困った時には助けてやって、チャンスの時にはフォローしてやる。僕がトライ・ゲッターだったのは、そういうことをやっていたからなんだ。そういうことを当たり前のように続けていたら、味方が自然と頼りにしてくるさ。社会の中の組織も一緒だよ。そういう組織でないと、会社も強くならないし、経営的効率も上がらない。そうしたコンビネーション、組織力が大事なんだ。サインプレーなんてコンビネーションでも何でもない。今の世界のラグビーは、流れの中でそういったコンビネーションを取れる。でも、日本のラグビーは決め事でないとできない。

小椋　この前のワールドカップ(以下 WC と表記)でジャパン(日本代表)は、前半はいい勝負するんだけど、後半はやられてしまう。どうしてでしょう？

尾崎　スタミナの問題もあるけれど、僕がジャパンで出た時にはその試合で死んでもいいと思ってグランドにでた。でも選手の中にはそうでないやつもいた。日の丸を背負っているにも拘わらず根性持ってないやつがいたんだよ。だからニュージーランドコルツに負けてしまった。闘争心がないとラグビーというスポーツでは生きていけないんだ。今度のジャパンもその時から進歩していないのさ。

小椋　そういうメンタリティが大事だと。

尾崎　そう。練習で疲れて動けない時に、意識してどれだけ練習に取り組めるかが大事なんだ。選手が伸びるか伸びないかの差はそこにある。死に物狂いでやってないから伸びないし、試合で力を発揮できない。東高から早稲田に入った時には、技術的にも精神的にも力の差をいやという程見せつけられた。東高では言わば「仲間のラグビー」をやっていた。それはそれでいいんだけど、早稲田のラグビーは違ってた。格闘技だった。あきれたよ。でもあきれると同時に、「よし挑戦してやろう」と思った。それからは人のプレーを見て貪欲に学んだよ。そしていいプレーを身につけようとした。早稲田で 1 年生の時、30 分ゲームが週に 18 ゲームあったんだけど、そのうち 1 回しか使ってもらえなかった。だから試合に出たときには、とにかくボールを持って前に出た。パスしたら自分の技術にならない。だからパスをせずに行くとこまで行った。でもボールは必ず生かした。監督の西野さんはそういうところを評価して僕を 1 本目に選んでくれたのかなぁ。そういう風にして大学時代に見る事の大切さを悟った。だから早く WC を招致して実物を若い選手に見せたいんだ。僕は森元総理と親しくて、2015 年に WC を日本誘致するなんて話が最初出た時に、「もっと早くやれ」、「早く本物を見せないといけないんだ」と森に言ってやったんだ。そしたら 2011 年に誘致する方向で話が進んでいる。

和田　2011 年に WC を招致する。今、尾崎が熱を入れてやっているんだ。協会関係者に働きかけているんだよ。

尾崎　ラグビーは、何よりもまず闘争心。そして、いい指導者と試合を見る機会。これが整えば全国で戦えるレベルになるんだ。

小椋　なるほど、奥が深いですね。本日は、貴重な話を沢山頂戴しましてどうもありがとうございました。

左から、尾崎さん、小椋さん、和田さん。
平成 16 年 2 月 4 日　セルリアンタワー東急ホテルにて対談